

葉集を読む

松岡 隆子

めでたさも気怠くなりて三日かな 鈴木 富代

言われてみるとそうだなあと納得させられる。昔から三日の三日間は、屠蘇を酌み雑煮や節料理を食べ、年賀客には年酒を振る舞うのが慣いとなっている。今でもそうするところもあるが、近ごろはめでたさも二日までという感じになつてきているようだ。三日ともなると正月気分も少々薄らぎ、賀客の予定とてなく、何するでなく時を過ごす。へめでたさも気怠くなりて」とは言い得て妙である。但しこれは晩年に差しかかった世代に限られる心境かもしれない。作者と同世代の者としては大いに共感を覚える。

時速百キロまつすぐに冬の富士 三宅まどか

いきなり(時速百キロ)と切り出されると、自分も同乗しているような気分になる。時速百キロの高速道路の先には富

士山が見え、その雄姿がだんだん近づいてくる。真つ青な空と真つ白な富士、そして時速百キロ、爽快感極まりない。かつて毎年のように山中湖に行っていた頃は、屢々掲句のような体験をしたが、(時速百キロ)というパンチの効いた語句は思いつかなかつた。掲句は省略が効いていて無駄な言葉がなく、七五五の破調も内容に適っている。

椅子の背にジャンパー注文はココア 西島 美晴

木枯しの街を歩いて来て、行きつけのカフェに立ち寄る。脱いだジャンパーを椅子の背にかけおもむろに腰をおろす。オーダーはいつものココア。というとかドラマの始まりのシーンのように思えるが、別に誰かを待っているようでもなさそうだ。ゆっくりとココアを飲みながら独りの時間を楽しんでる感じだ。それとも歳時記を手に俳句を考えているのかもかもしれない。掲句は名詞だけで構成されていて動詞がない分説明臭がなく、読者はそれぞれ想像の余地を楽しむことができる。また句またがりの破調も味わいがある。

整へしバックナンバー年暮るる 渡部 順子

多分「葉」だろう。時々書棚から取り出しそのままになっていたものを、バックナンバーを揃え書棚にきちんと並べなおす。歳時記も季節順に所定の位置に収める。書棚や机辺を整えるのも年用意の一つ。新年を迎えるにあたり新たな気持ちで俳句を詠もうとする心構えが窺える。